人物交差点

五百旗頭（いきべ）真（まこと）

（防衛大学校校長）

石原莞爾研究を皮切りに政治学者として活躍した知性が、恩師であり、仲人でもある猪木正道氏も務めたポストに転身した。強硬論が頭をもたげる時代だからこそ、その幅広い視野に期待が集まる

神戸大学教授から転身し防衛大学校の校長に就任した。首相の靖国参拝に疑問を呈し、イラク戦争にも批判的な普段のリベラルな言動からは、意外なポストに見えるかもしれない。

「安全保障が大事なことはよくわかっている。しかし今までやってきたことを辞めて専念しないといけないような話だろうと思ったし、私の人生設計にはないことでした」

決断までには曲折があった。

防衛大学校校長にという打診は昨春、旧知の渡邉昭夫氏（平和・安全保障研究所副会長）から突然もたらされた。

「君を推薦しておくから、話が来たら前向きに考えてよね」

その後音沙汰はなく、立ち消えになったかと思ったころ、防衛庁の幹部が神戸までやってきた。新聞や総合雑誌への寄稿はできるだけ続けてもらっていい、社会で活躍されているブランドごといただきたい――。関係者によると、小泉純一郎首相からも直接熱烈なラブコールがあったという。

神戸大学の定年退官まで残りわずか。自分を慕ってきた大学院生やゼミ生が、授業を楽しみにしている。週に一回のゼミはいつからか夜の十時まで五時間も討論を続ける「知的格闘の道場」になった。ジャーナリストを目指す学生を対象にした大学院科目の開設など、新しい試みも始めていた。

要請を受ければ、神戸での最後の一年を打ち捨てて防大に着任しなければならない。少し心を残しながらも断念せざるをえなかった。

ところが防衛庁側は諦めなかった。

「お待ちします」と言ってきた。

北朝鮮の脅威や自衛隊の海外派遣が常態化する中で、安全保障への関心が高まり、一部には強硬な軍事的決着を求める気運も生まれつつある。だが、

「そうした風潮があるからこそ、幅広い歴史的視野や国際的視点をもった人に将来の自衛官を教育してもらいたいという熱意に心を動かされた」と五百旗頭さんは振り返る。受諾できる環境がようやく整ったのは今年の六月下旬のことだった。

研究者としての出発点は「満州事変と石原莞爾」研究である。

一九六八年夏、京都大学修士二年の五百旗頭青年は石原の故郷・山形へと向かった。懐にあるのは指導教官の猪木正道氏に用立ててもらった一万円。石原本人はとうに亡くなっていたが、ふんどし一つで迎えてくれた偏屈者の弟に気に入られ、六日間通い詰めて貴重な手紙を見せてもらうことができた。

米国との戦争を宿命と予見し、そのために謀略さえめぐらして満州事変を強行した人物である。これをやらなければ一九三〇年代の軍国日本はわからないのでは……。最初のテーマ、石原莞爾研究は五百旗頭さんの人となりをよく伝えている。

ベトナム反戦やパリの五月革命、大学紛争と、世界中でカウンターカルチャーの嵐が吹き荒れた一九六八年。石原を取り上げるだけで「右翼」のレッテルを貼られかねなかったが、あえて修士論文のテーマに選んだ。

「私ももちろん軍国主義に賛成ではない。軍事という部分が政治という全体を支配してはならない。危機の中で国際性を見失った日本は昔も今もきわめて危険である。しかし内在的に理解するのが第一歩で、批判はその帰結」

先入観を排し、相手の話に耳を傾ける柔軟性や包容力をもって攻めるのがこの人の持ち味のようだ。

ゼミを指導してくれた猪木正道氏はほどなく防大校長に転じた。三代目の校長が猪木氏、五百旗頭さんは八代目にあたる。猪木氏は仲人でもあり、八月の防大初登庁では居並ぶ職員に恩師との縁を紹介したという。

「仲人を頼みにいったら、君の将来に傷がつくといけない、と防大に行く話を打ち明けられてね。学者の良心を捨てて軍事に身を売るように批判された当時です。戦前は軍事を軍人だけに任せたからいけなかった、防大に行くのは立派な決断だと思います、と仲人を受けてもらいました。私自身が校長になるとは想像もしなかったけれど」

五百旗頭さんに今期待されているのは、阪神大震災などで認知された自衛隊の力をどう禁欲的に使うか、「節度ある力」のあり方だろう。

佳子夫人と一男四女。亡父・真治郎氏も神戸大学教授を務めた経済学者という学者一家。首都大学東京准教授の長男・薫さんも、日本政治外交史の研究者として父と同じ道を歩む。

横須賀の官舎に引っ越し、隔週で週末に神戸へ帰る多忙な日々が始まる。名文家ながら遅筆でも有名な五百旗頭さんのこと。住まいが近くなり、東京の編集者は喜ぶかもしれない。

（俊）